チョーサーの英語*

——発音と形態——

A. O. Sandved 著

[Ⅲ]

(共訳)

田中俊也・三輪伸春・小城義也

佐藤哲三・松元浩一

(1990年10月1日　受理)

代名詞（57頁）

人称代名詞

下の一覧表はチョーサーの人称代名詞を，もっともよくみられる綴りで表したものである。

単　数	主　格 (主格形)	対　格 (目的格形)	第1属格 (所有形容詞形)	第2属格 (所有代名詞形)
1人称	I, ich	me	my, myn, myne	myn, myne
2人称	thou, thow	thee, the	thy, thyn, thyne	thyn, thyne
3人称				
男　性	he	hym, him	his	his
女　性	she	hire, hir, hyre	hire, hir, hyre, here	hire, hires
中　性	it, hit	it, hit	his	(his)?[6]
複　数				
1人称	we	us	oure, our	oure, oures
2人称	ye	yow, you	youre, your	youre, youres
3人称	they	hem	hire, hir, here	hirs

上の表が示すように，チョーサーの英語の人称代名詞の体系にみられる屈折の型は，現代英語と基本的には同じである。しかし相異も多少ある。そのほとんどは表から直接読みとれるだろう。現代英語と同じく，チョーサーの英語の人称代名詞は，人称（1，2，3人称），数（単数，複数），

格（主格，対格，属格）の区別がある。さらに，属格は第1属格，第2属格と呼ばれるものに分けられる。表の中の選択形（alternative designations）から明らかなように，第1属格は，一般に形容詞の働きを持つのに対し，第2属格は名詞的働きを担っている。4つめにあげた性（gender）は3人称単数にみられ，男性，女性，中性に区別される。

上の表では分からないチョーサーの英語と現代英語の相異は，数に関するものである。主格では，単数 I, ich，複数 we，単数 thou, thow，複数 ye 等の区別がある。1人称，2人称の第1，第2属格には，my, myn, myne; thy, thyn, thyne が見られる。これらは，それぞれ，単一人物 I, thou を指すので，単数形である。しかし，my lord, myn ye, thy servant, thy hors のような構造における my, myn, thy, thyn は，単数名詞，すなわち単一の主人，目，従僕，馬等を指示する名詞を限定するために使われるので，やはり，単数形である。ところが，myne eyen, thyne armes における myne, thyne は単一人物を指示するという点ではやはり単数であると言えるが，同時に，複数名詞，すなわち（2つの）目，腕を指す名詞を限定するので，複数である。（さらに，形態の上でも，複数形容詞にも使われる接尾辞 -e を持つことからも複数形だと分かる）

第2属格についても同様の区別がつけられる。たとえば，

Thanne oughte she be *myn* PF437 に対して，

Thise been the cokke wordes, and nat *myne* NPT3265。

第1属格の複数形 myne, thyne には厳格な使用上の制限があり，母音ではじまる語の前では，語末の -e は通常脱落するので，〔myne, thyne の使用は〕書記素レベル〔綴り字上〕に限定される〔つまり -e は発音されない〕。

チョーサーの英語と現代英語との，人称代名詞の体系の，他のちがいは，57頁の表でわかるであろう。

その中で，もっとも著しいのは，以下のとおりである。

(i)　第1属格（hire, oure, youre）と同じ形を持つ第2属格としての hire

For this was desir and *hire* also MillT 3407

ただし3人称単数，女性では，hires がふつうである。

I wol ben *hires* PF588

第2属格としての oure。

Oure is the voys PF545

1人称複数では oures がふつう。

Al this gold is *oures* PardT 786

第2属格としての youre，ただし2人称複数では youres がふつう。

Whan ye ben his al hool, as he is *youre* Tr 2. 587

Hoom to myn hous, or elles unto *youres* PardT 785

(ii)　3人称単数中性の属格に his を使うこと

That every sterre shulde come into *his* place

Ther it was first PF 68

In hire was everi at *his* reste PF376

its という形はチョーサーの英語にはない。

(iii) 3人称複数の対格に hem，属格に hire，here を使うこと。

So priketh hem nature in hir corages GenProl 11

チョーサーは時折，北部の人々の話しことばを特徴づけるために th- ではじまる代名詞を用いることがある。

Thair bodyes RvT4172.

その他の語形については次のようなことが言えよう。

1．1人称単数の ich /ɪtʃ/という形は比較的まれであるが，たとえば，MillT 3277には出てくる。thou: thow，hire: hir，thee: the のような綴りの変更形については，相対的で，出現頻度について一般化することは困難である。事実，CT では非常に少ない thow という綴りが，CT とは異なる作品の成立過程をもつ PF では，唯一の綴りである。

2．1人称，2人称単数の属格については，すでにいくらか述べたが，付記すべきことは，第1属格が -n を伴うかどうかは音韻的条件によって決まるということである。my と thy は/h/[7]以外の子音ではじまる語の前に現れるが，myn，thyn は母音または/h/ではじまる語の前に現れる。たとえば，

my fader soule，my tale;

my*n* accord，thy*n* owene heed，my*n* herte，thy*n* hors。

1人称単数属格が呼格表現において，後置された形容詞として用いられる時は myn の形になることも注目される。

lemman myn MillT 3700,

Cosyn myn KnT 1081,

brother myn MerchT 1521.

3．時折，脚韻において，ふつうでない，むしろ異常な形がみられる。例を少しあげると，Clerk's Tale 508行では，統語上，対格が必要なところに，2人称複数形 yee がみられる。

Ne I desire no thyng for to have,

Ne drede for to leese，save oonly *yee*,

(506行は me と脚韻を踏んでいる。) いくつかの写本は，単数形の thee をとり，統語上の要求を満たしているが，文脈上不適切である。508行を含むせりふの中で，Griselda は一貫して（ふさわしいと思われる）2人称複数の代名詞を用いているが，同じ物語の106行では yow が主格として現れる。

For certes，lord，so wel us liketh *yow*

And al youre werk, ... that we

We myghte lyven in moore felicitee.

(チョーサーの英語では liken (=LIKE) という動詞を含む構文では，たとえば us が liketh の間接目的語で，主語が，you And al youre werk であることはまず疑いない。)

脚韻に生じる3つ目のふつうでない形は，3人称単数女性の対格，here である。この形は時折，(一般的に/æ:/を含む語との) 脚韻に現れる。たとえば KnT 1421, 2057, ClT 887, Tr 3. 267, 4. 612。here という綴りは，チョーサーのテクストの最良の写本では，SHE の対格形としてふつうでないばかりではなく[8]，この形では母音/æ:/もふつうではないだろう。また一般に考えられているように，もし語末の -e が脚韻で発音されたとすれば，その脚韻における here は2音節であると考えなければならないだろう。しかし，韻律上の証拠から，チョーサーのテクストでは通常の形，hire, hyre は単音節である可能性が大きい[9]。もっとも hire との脚韻が不完全なものという考えかたもできる。

4. 2人称単数の主格の前に，疑問文の動詞が来るとき，しばしば -ou/ow という形をとる。

knowestow (='knowest thou') MillT 3156,

shaltou (='shalt thou') MillT 3575,

woldestow (='woldest thou') NPT 3346.

この現象は先行する動詞と後続の代名詞との融合 (merger) として説明することができる。このような融合が常に起こるわけではないことは，PF163を見れば分かる。

Yit that thow canst not do, yit mayst thow se.

疑問/関係代名詞 (61頁)

WHO

代名詞 who は人称代名詞と非常によく似た屈折をする。

主格	対格	属格 (第1属格と第2属格という形態上の区別はない)
who	whom	whos:

who artow	MillT 3766,
I noot to *whom* it myght displese	NPT3260,
if a prest be foul, on *whom* we truste	Gen Prol 501,
that fol (FOOL) of *whos* folie men ryme	Tr 1. 532,
The formel on youre hond ...	
Whos I am al	PF 419.

ここでは，WHO の形態にまつわる統語論にはかかわらない。しかし，whom も whos も疑問詞としても関係代名詞としても自由に用いられるが，チョーサーの英語には明らかに関係詞の主格と

して用いられた who の例はないということには，注意しておいてよいだろう。ただし，いわゆる「総称関係詞（generalizing relative）」，すなわち，'anyone who, whoever' という意味の複合関係詞 whoso は頻繁に現れる。

whoso list it nat yheere ...

('Anyone who doesn't want to hear it ...') MillT 3176,

And *whoso* hit doth PF 517.

同様に，who that については，たとえば，PF 487行参照。

WHICH

who の屈折が人称代名詞に似ているのに反し，which は複数に -e を取るので，形容詞に似ている。

a brooch ... On *which* ther was Gen Prol 161,

this Reve of *which* I telle ... Gen Prol 619,

He *which* that hath ... Gen Prol 836.

ただし，

whiche they weren Gen Prol 40,

herbes ... The *whiche* han NPT 2952,

paramours ... Of *whiche* the faireste ... Was NPT 2869,

bemes ... in *whiche* they blewe NPT 3399,

hennes ... Whiche were NPT 2867, etc.

多くの場合，語末の -e は脱落したようであるが，少なくとも時折発音されたのではないかということを示す，韻律上の証拠がある。たとえば，以下の3行を検討してみよ。

Women inowe, of *whiche* some ther weere PF 233,

Of *whiche* two Arcita highte that oon KnT 1013,

Lo, *whiche* sleightes and subtilitees MerchT 2421.

同じように，which(e) の前に the がある時，語末の -e は時々書き表され，明らかに時々は発音された。

The *whiche* vice he hydde, as he best myghte WBT 955,

The *whiche* thynges troublen al this erthe WBT 363,

Toward the *whiche* daunce he drow ful yerne WBT 993,

Among the *whiche* pointz yspoken was KnT 2972.

ただし，この場合 -e のない形態もある。

... a parissh clerk,

The *which* that was ycleped Absolon MillT 3313,

The *which* a long thyng were to devyse CIT 52,

Save o thyng priketh in my conscience,

The *which* I wol reherce in youre presence MerchT 1636.

指示代名詞 (62頁)

チョーサーの英語には説明を必要とする指示代名詞がふたつある。すなわち，数（単数と複数）に応じて屈折するふたつの指示代名詞である。

単数	複数	
that	tho	Gen Prol 498, MillT 3246;
this	thise	Gen Prol 701, MillT 3564, etc.
	these	PF 141, 293, 432, etc.

thise, these という形態は，常に単音節であったようである。事実，いくつかの写本には複数形として thes，さらには this という形態さえも見られる。

再帰代名詞 (62頁)

人称代名詞の対格形，あるいは，第1属格形とともに複合語を形成する -self は以下の形で現れる。

-self,	e.g. myself, thyself, hymself, hirself, itself, us self (ClT 108), your(e)self, hemself;
-selve,	e.g. myselve, thyselve, hymselve, hirselve, us selve (ParsT 345-50), your(e)selve, hemselve;
-selven,	e.g. myselven, thyselven, hymselven, hirselven, us selven (WBT 812), your(e)selven, hemselven.

himselve は時々中性で用いられることに注意すること。

ech thyng that is oned in *himselve* SumT 1968.

歴史的には，-selve, -selven という形は屈折形である。しかし，チョーサーの英語では屈折形と見なす証拠はまずない。-self と -selve(n) というふたつの形はチョーサーのテクストでは互いに入れ替えが可能と思われる。例。

Wel oghte a wyf rather *hirselven* slee

his wyf so deere FranklT 1397,

Hirselven slow FranklT 1415.

しかし，

Hasdrubales wyf,

That at Cartage birafte *hirself* hir lyf FranklT 1400,

Hath nat Lucresse yslayn *hirself*, allas! FranklT 1405.

上のすべての場合，統語上，再帰代名詞の「対格」形もしくは「目的語」形が要求される。換言すれば，-self: -selve(n) の対立によってでは格の区別は表されえない。同様に，-f と -ve(n) の双方ともに「主語」の位置に見られる。

For he hadde power of confessioun,

As seyde *hymself*, moore than a curat Gen Prol 219,

He folwed it *hymselve* Gen Prol 528,

I wol *myselven* goodly with yow ryde Gen Prol 803.

-selves という形はチョーサーのテクストには見られない。

動詞（63頁）

チョーサーの英語における動詞が屈折するのは，次のような文法範ちゅうに関してである。**時制**（現在と過去），**数**（単数と複数），**人称**（単数の場合だけが1，2，3人称の区別がなされる），そして法（直説法，接続法，命令法）。さらに三つの**非定形**（non-finite）は，他と区別される屈折特徴をもつ。

非定形（64頁）

非定形は以下の三つである。

1．不定詞。有声の歯茎鼻音の接尾辞 -(e)n によって形成され，ふたつの異形態をもつ。

/ən/，大部分の動詞とともに使われる。

/n/，限られた数の動詞とともに用いられ，その動詞の語幹は母音で終わる。たとえば，don, fleen, gon, seyn（seye(n) もまた見られる）。

不定詞に付く接尾辞 -n は極めて頻繁に脱落する。そして/n/が消失したことによって，語末に残った -e はチョーサーの英語に存在する他の語末の/ə/と同じように扱われる。即ち，語末の -e は韻律上の必要があれば脱落したり保持されたりする（上述16頁参照）。たとえば，次の例においては，韻律によって，二音節の不定詞形が必要とされるようである。

To *ride* by the weye doumb as a stoon Gen Prol 774,

To *telle* yow hir wordes and hir cheere Gen Prol 728,

And for to make yow the moore mury Gen Prol 802.

他方，以下の行の例に関しては，不定詞は単音節である。

He was on esy man to *yeve* penaunce　　Gen Prol 223,

Strong was the wyn, and wel to *drynke* us leste　　Gen Prol 750,

To *kepe* his foreward by his free assent　　Gen Prol 852.

2．**現在分詞**。接尾辞/ɪng/によって作られ，ふつう -ynge もしくは -yng と綴られる。

Syngynge he was, or *floytynge*, al the day　　Gen Prol 91,

a *whistlynge* wynd　　Gen Prol 170,

A daggere *hangynge* on a laas　　Gen Prol 392,

This Nicholas sat evere *capyng* upright　　MillT 3444,

abidyng Goddes grace　　MillT 3595,

... Was whilom *dewllyng* in a narwe cotage　　NPT 2822.

3．**過去分詞**。過去分詞の形成については後に詳しく扱う（65頁以下参照）。ここでは，以下のことを指摘することで十分であろう。

(a)　過去分詞は，しばしば接頭辞に/ɪ/をとり，y- や i-（頻度は少ない）と綴られる。

ybore Gen Prol 378, ycome Gen Prol 77,

ycleped Gen Prol 376, ydrawe Gen Prol 396,

ypreved Gen Prol 485, ypunysshed Gen Prol 657;

ibounden PF 268, ibroke PF 282,

ifounded PF 231, imaked PF 677.

(b)　母音置換によって過去時制と過去分詞を作る動詞の過去分詞（後述71頁以下参照）は，しばしば -(e)n と綴られる。接尾辞/ən/もしくは/n/をとる。

broken, songen, wonnen.

しかし，不定詞の -(e)n と同様に，この接尾辞もしばしば脱落する。その結果，非常に多くの動詞が過去分詞に二つの形をもつ。

dryven: dryve, writen: write;

bigonnen: bigonne; wonnen: wonne;

broken: broke; born: bore;

fallen: falle, etc.

(c)　接尾辞/əd/の付加によって過去時制と過去分詞を作る動詞の過去分詞（後述参照）は時として付加的な接尾辞の/ə/をとることがあるが，通常このような過去分詞は屈折しない。

the diverse causes of nature that weren *yhidde* (Bo 1.m. 2.27),

Alle other dredes weren from him *fledde* (Tr 1. 463).

これから，チョーサーの英語における定形動詞の屈折形を幾分詳しく考えてみよう。

時制を表す屈折（65頁）

伝統的に，動詞は大きく二つに分類されてきた。「強変化（strong)」（あるいは母音交替）と，「弱変化（weak)」（あるいは子音の付加）である。強変化は，write-wrote-written のように，母音交替によって過去時制と過去分詞がつくられるもので，弱変化は，過去時制と過去分詞が，love-loved-loved のように屈折接尾辞を付け加えることによって作られるものである。この分類が，現代英語では余り役にたたないことと，本書の関心の中心が，チョーサーの英語と現代英語の比較ということにあることから，伝統的な分類は本書では用いない。まず第一の基本的な分類は，「規則動詞」と「不規則動詞」である。

規則変化による時制形成

チョーサーの英語の動詞の**過去時制**は，動詞の語幹，すなわち不定詞から接尾辞/ən/や/n/を取り除いた形に，-ed と綴られる接尾辞/əd/を付加することによって，規則的に作られる。**過去分詞**も同じようにつくられる。

arryve[10]	arryved	arryved,
assaye	assayed	assayed,
deme	demed	demed,
save	saved	saved.

語幹が歯茎破裂音で終わる added, hated のような語の場合，-ed は，語幹とは別の音節を構成したことは疑いの余地はない。しかし，今日，過去と過去分詞の接尾辞がひとつの音節を構成しない動詞においても，過去時制と過去分詞の/əd/がはっきりと発音されることを示す確かな韻律上の証拠がある。たとえば，次の例を考えてみよう。

And *bathed* every veyn in swich licour	Gen Prol 3,
Hir over-lippe *wyped* she so clene ...	Gen Prol 133,
But wel I woot he *lyed* right indede	Gen Prol 659;
And they were *clothed* alle in o lyveree	Gen Prol 363,
... Why that *assembled* was this compaignye	Gen Prol 717,
... That was *arrayed* in that same wise	NPT 3037.

他方，規則的な過去時制の接尾辞の/ə/と，過去分詞の接尾辞の/ə/が，時折語中音消失したことを示す韻律上の証拠がある。（過去分詞の方が幾分頻度が高い。）もちろん，このことは過去と過去分詞の形成の「規則性」が，書記法上のレベルに限られていることを意味する。たとえば，次のような例を考えてみよう。

Wel *loved* he by the morwe a sop in wyn	Gen Prol 334,
For verray shame, and *blamed* hymself for he	

Had toold to me so greet a pryvetee　　WBT 541,

And forth he *cleped* (/klept/?) a squier

and a mayde　　FranklT 1487;

This worthy lymytour was *cleped* (/klept/?) Huberd　　Gen Prol 269,

For in his purs he sholde *ypunysshed* (/ɪ́pʊ nɪʃt/?) be

Gen Prol 657,

And *batailled* as it were a castel wal　　NPT 2860.

時々過去時制の接尾辞は -ede と綴られ，韻律上の証拠によると，-ede の最後の -e は通常は発音されなかったことを示している。

So hoote he *lovede* that by nyghtertale

He sleep namoore than ...　　Gen Prol 97,

Therefore he *lovede* gold in special　　Gen Prol 444,

And *warnede* hym beforn of al his grace　　PF 45.

しかし，また -ede は時として二音節であったことを示す韻律上の証拠も存在する。

And of manhod hym *lakkede* right naught　　Gen Prol 756,

Who *peyntede* the leon, tel me who?　　WBT 692,

As I his suster *servede* by nyghte　　ClT 640.

不規則な時制の形成（67頁）

/əd/（綴りは -ed）を過去時制と過去分詞の形態素の「規則的な」（異）形態（'regular' allomorph）と呼ぶことによって，当然，間接的にその他の全ての（異）形態を「不規則」と呼んできた。ここで，これらの中で最も大切なものを考えてみよう。以下に示される不規則な（異）形態の調査も，どの下位分類で示される動詞の一覧表も完全なものではないことは強調されるべきであろう。また，異形がいくつか共存する場合に，たとえ比較的たくさんの異形態が挙げられてきたとしても，そのような異形態の完全な一覧表を提供する試みはなされたことはない。不規則な（異）形態は，二，三の大きいグループに分かれ，それらは次の通りである。(1) **付加**（additives）— 接尾辞が語幹に付加される，(2) **置換**（replacives）— 語幹の母音が別の母音に置き換えられる，(3)**ゼロ異形態**（zero allomorphs）— 現在形，過去形，過去分詞形の形態上の区別がない。（付加は置換と結びついて生じることがよくある。）[11]

付　加

1．過去時制 -de，過去分詞 -d

動詞の中には語幹に/də/（-de と綴られる）を付加することによって過去時制を，/d/（-d と

綴られる）を付加することによって過去分詞を作るものがある。

例。

here herde herd; leye leyde leyd;

pleye pleyde pleyd; seye seyde seyd.

いくつかの動詞では，-de と -d の接尾辞は現在時制体系（present system）[12]で見い出される語幹と比べると，少し変化を受けた語幹に付加される。たとえば，いくつかの動詞では付加は母音置換と結びつけられる。

(a) 置換/e/→/ɔ:/

selle solde soold, telle tolde toold.

(b) 置換/i:/→/ɪ/

bityde bitydde bityd, hyde hydde hyd.

(c) 置換/e:/→/e/

fede fedde fed; spede spedde sped.

(b)と(c)のグループにおける動詞は歴史的にみれば，付加型（弱変化動詞）に属する。したがって，たとえば OE では hyde と feede は，hȳdan — hȳdde, fēdan — fēdde として現れる。チョーサーの英語では，これらの動詞の過去時制の形態素は母音置換の形をとる。

/hi:də/ /hɪdə/ /hɪd/, /fe:də/ /fedə/ /fed/.

（なるほど現在時制体系と過去時制の間には子音の長さの点で違いがあったかもしれない。すなわち，過去時制の/d/の方が長かったかもしれないが，チョーサーの英語では子音の長さは恐らく音素的ではなかったであろう。）しかしながら，一方においては(b)と(c)のグループにおける動詞間に，他方においては置換動詞の間にいくぶん違いはある。一つには過去分詞は置換動詞に特有な語尾/ən/を取ることは決してない[13]。第二に，2人称単数過去時制の屈折形は付加動詞の場合に見い出される形，すなわち，-est をもった形である（thou feddest, thou speddest; cf. thou songe, thou founde）[14]。こういう理由で，動詞は接尾辞が変化した語幹に付加されている付加動詞として分類される。事実，語幹は二重の変化を受けている。語幹母音が変化しているばかりでなく，語幹末の/d/が，接尾辞が加えられる前に落ちている[15]。-te, -t をもった同様のタイプの動詞に関しては71ページ参照。

この型の動詞に関して，もし韻律上の必要があれば，語末の/ə/の省略が母音や/h/の前で起こりがちであるということを銘記しておきたい。このことは/hɪdə/という過去時制の他に，/hɪd/のような接尾辞なしの別の形があったことを意味する。次に WBT, 745行の例を挙げる。

Wher that hir housbonde hidde hym in a place

この行で，韻律により，hidde は/hɪd/と発音されるということがはっきり分かる。以下に示されているように hadde の他に had もある。

(d) いくつかの動詞において，置換 /e:/→/e/ は /e:/→/a/ と交替可能。

lede	ledde,	led,
lad（よりひんぱんに）	ladde（よりひんぱんに）	lad
rede	redde	rad
	radde	
shede	shedde	sched
	shadde（MkT 2731行の脚韻で）	shad
sprede	spradde	sprad
		yspred（RvT 4140行の脚韻で）

やや異なった語幹の変化，すなわち，語幹末の子音の消失が次の例にみられる。

have　　hadde　　had.

この場合の別形として，不定詞（と複数現在形）では han が，過去時制では had がある。

否定形 nadde（＝ne hadde）もある。直説法三人称単数現在形では nath（＝ne hath）が生じる。これについては WBT 100行を参照。

歴史的にみれば，まったく異なるものであるが，チョーサーの英語においては -de，-d 動詞といくつかの形態的類似点をもつようになったのは次の動詞である。

wol　　wolde　　wold

この動詞の通常の形は，

一人称単数	wol(e), wil[16]	wolde	wold.
二人称単数	wolt, wilt[16]	woldest	
三人称単数	wol(e), wil[16]	wolde	
複数	wol(e)	wolde(n)	

この動詞には次のような否定形もある。

nyl　　nolde.

nylt

2．過去時制 -te，過去分詞制 -t

-te/-t 形態は，置換動詞あるいは語幹の他の変化と結びつく以外はまれである。-te/-t が不変化語幹に付加された動詞の例。

atteyne　　atteynt

clappe　　clapte

spille　　spilt.

語幹の変化と結びついたもの。

(a) 置換 /e:/→/e/

lene ('lend') lente lent.

他の例として78ページにある fele, kepe 等も参照。

(b) 次の２つの動詞の場合，上記の１．(d)と同様に /e:/→/e/ が /e:/→/a/ と交替可能。しかし，さらに -te/-t 動詞には子音置換が生じ，語幹末の /v/ は対応する無声摩擦音 /f/ と置き換わる。

leve	lefte	left,
	lafte	laft
reve ('rob')	refte,	reft,
	raft	raft

(c) 母音と子音の両方にかかわるやや異質の置換が次の例に見られる。

quenche queynte queynt[17]

(d) 語幹末の /tʃ/ を落とす動詞が１つある。

fecche fette fet;

しかし，この動詞の不定詞は fette の形でも生じる。Tr 3. 609 (脚韻において)。

(e) 過去時制 /ɔuxtə/，過去分詞 /ɔuxt/ 現在時制体系がいろいろな形をもっている動詞は音素的に共通な過去時制 /ɔuxtə/ (綴りは -o(u)ght) をもつ。

(a) bye[18]	(a) boughte	(a) bo(u)ght
byseche	bysoughte	
beseke		
bythynke,	bythoughte	bythoght
bythenke		
brynge	broughte	brought
recche ('care')	roughte	
rekke		
seke,	soughte	sought
seche		
thynke,	thoughte	thought
thenke,		
thenche (MillT 3253行の脚韻で)		
werke,	wroughte	wrought.
werche,		
wirche		

(f) 二，三の動詞は過去時制に /auxtə/ を，過去分詞に /auxt/ をもつ。

cacche	caughte	caught
reche ('reach')	raughte[19]	
teche	taughte	taught.

(g) 動詞の中には /tə/ や /t/ を付加する前に語幹末の /d/ を落とすものがある。

bende	bente	bent
blende ('blind')	blente	blent
girde		girt
rende	rente	rent
sende	sente	sent
shende	shente	shent
wende	wente	went.

(h) 次の 3 つの動詞では，長母音 /e:/，/i:/→ 短母音 /e/，/ɪ/ の置換がある。これらの動詞を置換動詞というよりは，むしろ付加動詞とみなす理由に関しては68頁を参照。

grete ('great')	grette	gret
mete	mette	met
quite	quit	quit

＊本翻訳は，A. O. Sandved, *An Introduction to Chaucerian English*, 1985, Cambridge: D. S. Brewer の全訳である。全体は 4 分冊からなっており，本編はその第Ⅲ分冊である。なお，第Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ分冊は次の機関の紀要に発表されている。

第Ⅰ分冊　鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第33号　1991年

第Ⅱ分冊　第一工業大学『研究報告』第 3 号　1991年

第Ⅳ分冊　鹿児島女子大学『研究紀要』第12号　1991年

共訳者の所属は以下の通りである。

三輪伸春（鹿児島大学法文学部）

小城義也（鹿児島女子大学）

佐藤哲三（第一工業大学）

松元浩一（鹿児島大学法文学部）

注 6　チョーサーの作品に 3 人称単数中性第 2 属格が現れるかどうか分からないが，もし現れるとすれば，his の形をとったことは疑いない。

注 7　ここでとりあげた語では語頭音 h は発音されたと仮定する。

注 8　ただし，here という形は，**属格**女性単数 3 人称と複数属格でみられる。

注 9　第 1 属格形の oure も youre も一様に単音節だったようである。

注10　本章で示されている動詞は，たとえ -(e)n をもつ動詞形態と持たない動詞形態の両方が，文献上記録さ

れていたとしても，厳密には時制の形成に関与しているとはいえない接辞がついていない方の形で出ている。たとえば，過去複数によくみられる -(e)n，不定詞の接尾辞 -(e)n，過去分詞の接頭辞 y-，そして通常の過去分詞の接尾辞 -(e)n といったものがある。begynne: bygynne: bigynne; caughte: kaughte; wroot: wrot（='wrote'）等にみられるような書記法上の異形態も，通常考慮されないということに注意が必要である。

注11 「付加」,「置換」と「ゼロ」という術語は，**過去時制と過去分詞の形態素の異形態**に言及するためにここで用いられている。「過去時制と過去分詞が，過去時制と過去分詞の形態素の付加，置換，あるいはゼロ異形態によって作られる動詞」という重苦しくぎこちない表現を使わずに，便宜上，これらを「付加動詞」,「置換動詞」,「ゼロ動詞」と呼ぶことにする。

注12 「現在時制体系」は不定詞，直説法現在形，接続法現在形と命令法のことである。

注13 過去分詞 hidden は後になって形成されたものである。

注14 このことに関しては，後述85頁を見よ。

注15 あるいは，語幹末の/d/は接尾辞の/d/に溶け込んだとも言えよう。

注16 wil, wilt, wil の方が頻度が少ない。

注17 79頁の drenche も参照。

注18 (a)beye も生じる。

注19 過去時制 reighte は HF1374行の脚韻で生じる。

目　次

〔I〕（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第33号1991年に掲載）
はしがき
目次
チョーサーの作品の略語表
序論
第1部　音韻論
　1．序章
　2．短母音
　　短母音の綴り
　　語末の -e
　3．長母音
　　長母音体系の諸問題
　　前舌円唇狭口長母音/y:/
　　長母音 'e'
　　長母音 'o'
　　長母音の綴り

〔II〕（第一工業大学『研究報告』第3号1991年に掲載）
　4．二重母音
　　二重母音の綴り
　5．発音の規則
　6．子音

第2部　形態論
　7．序章
　8．接頭辞
　9．派生接尾辞
　10．屈折

名詞
　数を表す屈折
　　規則的な複数形成
　　不規則的な複数形成
　　-(e)n 複数
　　母音変化による複数
　　ゼロ複数
　　2音節以上から成る名詞の複数形
　　異形態的語幹交替を伴う複数形
　格を表す屈折
　　属格
　　複数名詞の属格
　　与格
形容詞と副詞
　数を表す屈折
　限定性を表す屈折
　級の屈折（比較）
　　規則的な比較変化
　　不規則的な比較変化
　　副詞の比較変化
　派生機能をもつ接尾辞 -er と -est

〔Ⅲ〕(本編)
代名詞
　人称代名詞
　疑問・関係代名詞
　指示代名詞
　再帰代名詞
動詞
　不定形
　時制の屈折
　　規則的な時制形成
　　不規則的な時制形成
　　付加

〔Ⅳ〕(鹿児島女子大学『研究紀要』第12号1991年に掲載)
　　母音交替
　　ゼロ動詞
　　be 動詞
　　違うクラスを動揺する動詞
　　過去現在動詞
　数，人称，法の屈折

(尚，本翻訳では，原著の巻末にある Appendix，Select Bibliography，Subject Index と Word Index は省略する。)